However, the basic premise of "available for anyone equally" has led to emphasis that anyone can use facilities designed for those with disabilities, and this has led to ambiguity over the core purpose of the use of such facilities. There has been misunderstanding over the purpose and the intended user of the facilities, leading to problems where wheelchair users who require such facilities have not been able to access them. Urban landscaping began with guaranteeing social participation for those with disabilities as one of its goals, and it has developed to this day while responding to the changes in the nation's social conditions. This is a fundamental issue for social welfare for those with disabilities, in enabling a complete restoration of their humanity for those with disabilities, based on the principle of normalization. This purpose will not change, even in the present.

Norihito Nakao — Han Resources in Tenri University Sankokan Museum Collection (12) Menfei and Longzhu

Our museum displays and stores various resources, but one feature is that there are many large-scale resources. In this article, I will introduce two such resources: menfei (gate doors) and longzhu (dragon pillars)

Menfei were installed in the residences of high-level bureaucrats in Taiwan's Chiayi region. Dual doors opened to both sides and had inscriptions of a civil bureaucrat dressed in formal attire. Drawings inscribed on gate doors are called menhua (gate drawing), and these were meant as charms to ensure that evil things such as illness or disaster would not enter the house and to pray for good luck leading to happiness.

Also, as for longzhu, one or two such pillars were often erected in front of the gate of temple mausoleums and residences. The one on display at our museum is made of stone with dragon inscriptions on both sides (there are also coloring in certain places). The two dragons face each other with their jaws wide open while seemingly dancing in the clouds.

人権問題研究室公開研究会にて発題

堀内みどり

11 月 26 日、天理大学人権問題研究室主催の標記研究会が、同研究室で行われ、「同性婚:夫婦とは何かについて考えてみる」と題して発題した。性の多様性について、昨今ではいろいろなことが語られる。たとえば、性を男と女としてだけ捉えることの“困難さ”や第 3 の性が存在する文化、男性性・女性性と父性と母性との連関、あるいは性的指向にかかわることなど。

これまで疑いもなく否定されてきたであろう「同性」との婚姻ということを考え、「同性婚」夫婦という事実について宗教がどのような態度をとっているのか、また、どのように対応しているのかという点に注目し、最近の事例を紹介しつつ、「性別のある」人間が、ただ生殖のためだけではなく、“夫婦”という関係を望むということについて考えてみた。

第 276 回研究報告会（11 月 28 日）

17 世紀初頭の長崎における聖なる空間と「小教区制度」

トロヌ・カルラ
（天理大学国際学部研修生・JSPS 研究生）

本報告では、16・17 世紀の長崎においての「聖なる空間」の変換について検討した。まず、「聖なる空間」の概念について説明し、1571 年の長崎開港から始まった長崎のキリスト教化過程と、以降 1614 年の禁教令に始まる一連の非キリスト教化過程を紹介した。注目点は、17 世紀初頭に司教によって導入されたカトリックの「小教区制度」である。それによって長崎は 11 の「小教区」に分けられ、町人が各小教区教会にキリシタン講を組織し、典礼に参加した。 カトリックの小教区制度は、16 世紀ヨーロッパの宗教改革の運動の中で開かれたトリエント公会議によって正式に制定された。しかし、公式の小教区制度と日本のものとは若干異なるため、両者の相違について考察した。最後に、キリシタン研究のための主要な海外写本コレクションであるローマイエズス会文庫の Japonica Sinica コレクションと、スペインにあるフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチヌス会のそれぞれの文庫を紹介した。

第 2 回宗教研究会

「アメリカ合衆国における同性婚と宗教」

金子珠理

12 月 13 日、朝香知己氏（同志社大学一神教学際研究センター特別研究員）を講師として標記研究会を開催した。アメリカ合衆国は、レズビアン／ゲイ解放運動の端緒とされるストーンウォール暴動（1969 年）の起こった地であり、その後の運動の実践や理論形成などの点で世界中に影響を与える主導的役割を果たしてきた。天理教のアメリカ伝道においても、同性婚をめぐる問題は考察を要する切実なテーマとなっている。朝香氏はまず、州ごとに異なる同性婚の法的扱い、そして宗教・教派による公式見解の違いを解説した。ユダヤ教改革派・保守派が同性婚に賛成であること、同性婚を容認しないカトリック教会の場合でも信者レベルでは 60%が同性婚を支持しているなど、数々の意外な側面を知り得た。また同性婚を容認する宗教・教派は、結婚の宗教的意味を捨て去るのではなく、むしろ同性婚を容認可能にする宗教的意味を見出している、との朝香氏の見解は示唆深い。同性婚容認派の傾向としては、人間の男女性（相補性）や生殖の強調ではなく、パートナーの結合に意味を見出しているという。性の二元性が性科学やジェンダー研究によって揺らいでいる現在、結婚の地位を相対化する神学的試みがなされている（聖書における反結婚や反血族家族的側面、パウロにおける生殖と性的活動との非同一視など）。朝香氏は、世俗的な現代社会において宗教がなすべきことは、結婚の宗教的意味を捨て去ることではなく、変化する時代の流れの中で、世俗的意味と対話しながら神（聖書、伝統）の声を聞くことによって、より望ましいあり方を求め続けることであると、結論づけた。

第 277 回研究報告会（12 月 15 日）

堀内みどり

「The Third Tenri University – Marburg University Joint Research Project に参加して」と題して、9 月にマールブルク大学で行われた共同研究プロジェクトの報告をした。今回の共同研究は「Materiality in Religion and Culture」をテーマとし、同大学の宗教博物館を会場に、2014 年 9 月 16 日～ 19 日にかけて行われた。

報告会では、研究テーマに基づいて議論されたそれぞれの発表について簡単に述べ、その様子をパワーポイントで紹介した。